

都道府県別賞一等

大切なことを共有を

岡山県 岡山理科大学附属中学校 二学年

藤村 明梨

平成二十九年七月二十四日。あの日のことは一生忘れないだろう。

当時、私は小学一年生。この日は、夏休みに入って最初の月曜日だった。初めてのラジオ体操を終え、庭の朝顔に水をやり、母に急かされながら朝食をとった。学童に行く準備のあと、お弁当を受け取りにキッチンに行くと、母が真っ青な顔で携帯電話を握りしめていた。そのまま、訳も分からないまま車に乗せられ、見慣れた道を進み、到着したのは祖父母宅。同じく、顔面蒼白の祖母と、救急車に乗せられるぐったりした祖父の姿を目の当たりにし、呆然とした。祖父はそのまま帰らぬ人となった。あまりに突然のお別れだった。

祖父が亡くなる一カ月前、曾祖母が脳梗塞で倒れて入院した。祖父母宅と曾祖母と曾祖父の家は隣同士。曾祖母が倒れた時には、親族皆でお見舞いに行き、祖父母と両親は病院の先生や職員の方の話を長時間聞いて、たくさんの手続きをしていた。とても大変そうだった。特に手を焼いていたのは、保険の請求。認知症などなく、車の運転も買い物もすべて自分で行っていたしっかり者の曾祖母が、保険の書類などの貴重品をどこに片づけているのか、そもそもどこの保険に入っているのかも分からなかったようだ。同居していた曾祖父は、難聴と軽度の認知症で把握していない。祖父母も、隣とはいえ別々の家で暮らしていたから、把握していなかった。結局、家族総出で曾祖母宅を搜索し、貴重品入れを発見して、無事に手続きができたのだと後日聞いた。

曾祖母が入院して以来、もともととても几帳面だった祖母が、私と母の前で

「私に何かあったら、この棚を確認してね。」

と、時々声をかけるようになった。

「もしものことなんて、起こらないよ。」

と言いつつ、一応内容は確認した。そのような経験もあって、祖父が亡くなった後は、落ち着いた後、スムーズに保険会社に連絡ができたらしい。保険会社に電話した時、ずっと気が張っていた祖母が、担当者の方からの温かい言葉で、泣いて会話ができなくなっていたと母から聞いた。祖父が救急車で運ばれた時、喪主として挨拶をしていた時、祖父が小さくなって帰宅してみんなで祭壇を組み立てた時――。葬儀の前後で色々な祖母の姿を見てきたが、ずっとしっかり者の祖母のままだったと思ひ出した。母からの話を聞いて、祖母がどれだけ気負っていて、子どもや孫たちに心配をかけまいと気丈に振舞っていたのかを気付かされた。

第62回中学生作文コンクール

保険はいざという時のお守りというだけでなく、家族には見せられない顔も見せられて、心も支えてくれているのだと感じた。今でも時々、祖母宅に担当の方が訪ねてくれる。高齢者を見守る意味でも、生命保険は今後、なくてはならない存在だと思う。

曾祖母はその後、高次脳機能障害で施設に入所している。曾祖母が倒れたのは、とても不幸な出来事だった。でもそのおかげで、大切なものはどこにあるかを家族に共有する、ということの大切さを学んだ。祖父が亡くなったのは、心をえぐられるように感じるほどとても辛い経験だった。でもそのおかげで、保険がお守りになるというだけでなく、時には家族には言えないことや見せられない顔を見せられ、心の支えにもなってくれるという、心強い一面もあると分かった。

以来、一日の出来事を家で話すのが日課になった。大事なことほど家族と共有しながら、その大切さを色々な人に伝えていきたい。

最後に、この場をお借りして一言。あの日、祖母に暖かい言葉をかけて下さった保険会社の担当者さん。あの時は本当にありがとうございました。私もあなたのように、いざという時に、相手に寄り添えるような言葉をかけられる大人になりたいと思いました。引き続き、祖母のことをよろしくお願いします！